

よりシベリアが開発されたのである。

したたかな命

茨城県 松本 要祐

昭和十六年三月、ソ満第四国境守備工兵隊を召集解除になり、引き続き関東軍司令部の軍属として勤務中、昭和二十年八月七日応急動員令下、新京特別市防衛部隊として兵役に入る。

同八月二十日終戦、所属部隊は解散した。わずか二週間の極めて短い付き合いで、大正五年兵の戦友がたまたま新京市内に住居があり、同居する。無職となつて早速日常生活に支障が起きたので、大道店やその他のいろいろの手段で約一か月余り過ごしたころ、ソ連軍大五軍司令部が居所近くに進駐してきて、二元軍人軍属は直ちに出頭せよ、違反者は銃殺に処す、との張り紙に驚き、指定の場所に集まったところ、一網打尽捕虜となり、南嶺の捕虜収容所にひとまず留置の上、数日後新京駅（現長春駅）

の貨物駅まで連行され、そこで元日本軍の新しい軍服に着替えさせられる。

一貨車五、六十人くらい（内部は急造の二階づくり）ずつ乗車させられ、入り口は分厚い板にて釘づけ、便所は一両ごとに床の中央に長方形の小さい穴を切り抜いただけで、わきにストープが一基、発車後はどこをどう走っていることや、入ソ経路などは皆目不明、何日目にソ連領シベリア鉄道を走行中らしいことだけはわかった。途中イルクーツクと呼ぶ駅をたつてから数時間後のこと、ストープのたき口からこぼれ落ちた火種が貨車の床に燃えついていたのを、用便に起きた同僚が見つけた。「大変だー」の大声に一同飛び起きた。何分真夜中の出来事にて警備隊は貨車の屋根にいて知らせようもなく、だれからともなく小便の出そうな者が全員そこに集まり、交互に消化に努めた。見た目にはまさに鎮火したようでも、走行中の貨車の小さい窓から入る風でまた燃え出す始末で、ついに全員手持ちの命から二番目に大切にしていた水筒を全部カラにしてやっとな消化に成功し、焼死は免れた。貨車はそのような大事件も知らぬ顔に走

行を続け、大きな駅に何度か停車しながら、シベリア地帯では屈指の出炭地チエレンホウボウに到着した。下車と同時に運動不足からだれもの足がガクガクで、しばし歩行ができない始末であった。数百メートルくらい先に幾つかの大きなボタ山が見えて、その付近に炭鉱の施設があったので、だれともなく「やあー石炭掘りをさせられるぞォー」とささやき合った。

それから収容された家屋は一面雪原の中に十数棟あり、中は二段に仕切られ、一人当たりのスペースも狭いものだった。ここで一番容易でなかったのが用便で、何しろ千余人の人数なので、庭先五十メートルくらいのところ直徑五十メートル前後の浅い穴が掘ってあり、回りに囲いはなく、どこからでも飛び込んで用が足せる。吹雪く夜などは、電光石火型に用を足さぬことには露出したところが凍傷になる騒ぎで、排泄物は即、カチカチになるので悪臭も絶対に関心なし、数か月後に炭鉱の三交代制の暇を利用して、収容所も半地下式のもの建造し、春先の雪解け時を見計らって便所もつくり上げた。電柱が二本もつないで入るほどの細長い深穴を掘

り、そこに丸い穴を等間隔にあけた厚板を渡し、一度に百人程度が使用できる屋根つきの豪華なものであったが、もちろん個人ごとの仕切りはなかった。それからしばらくしてから他の収容所にパラチフスがまん延し、多数の同僚が死去した情報はいり、それまでは十日に一回くらいの割で町の浴場を利用してしたが、急ぎ浴場も設備し、衣類の熱気消毒所も併設、保健に大いに役立つた。浴場といっても搬入水が容易でなく、一週三回程度の利用で、大き目の木製のおけに湯は三杯、水は二杯と制限されていて、この範囲の中で体を洗い、肌着類の洗濯を完全にやっけてのけるコツをだれもが体得したものである。

食生活についてはあまりにも粗悪で、話の外、次のような例があったことで察しはつくと思われる。同僚の一人に「豚泣かせ」の異名をつけられた者がいる。収容所の片隅に炊事の残飯で飼育していた豚のえさを上前をハネて食べていたので、この名をつけられた。これとは別に元満州国軍の上級将校（日本人）とかが、小便所の中に投棄される馬鈴薯の小さな粒を拾って焼いて食べた

か、同僚の一人が少ない黒パンを節食しながら煙草と交換しようと、積んどいたのを作業中に盗食されたとか、当時食べ物に対してはかなりの自制心を必要とした悲惨な毎日であった。

当時のつらいことがだれにも共通して三語あった。

「寒い」「眠い」「腹がへった」

どれをとっても平等につらいことであった。

真っ暗な坑道に入ると、監督の目を盗んでは炭壁に寄りかかって、疲労のためよく立ち眠りをした。自分には小学校のころ他界した母親が馳走をさげて、その場所から数回夢で現れたものである。日本の片田舎の墓地からはるばるシベリアの地下で強制労働をさせられてる息子が心配で見に来てくれたのかと思うと、人知れずこぼした涙を握りこぶしでこすり、粉炭で汚れた顔が真っ黒になり、現場監督からハラシヨラボーチだと肩をたたかれたこともあった。

収容所で一年半くらい生活しているうち病魔に冒され、二十人くらいの病兵と「ジマ」というところの陸軍病院に転送された。そこで入院中だった同志が、望郷の

念を胸中に秘めたまま栄養失調症により体が風船のようにむくみがきて、その後ベチャンコにむくみが去ると、もの言わぬ人となるのを見たり聞いたりして、我が身にももしやとの苦悩する日があった。そこで三か月ほどして身体検査の結果、軽症の同士たち百人くらいが日本に送還されるのとこと、やがてナホトカ港に送られ、なぎさにつくられた幕舎に約一か月、起居休息の日が続いて海上に氷片が浮き出すころ、帰還船山澄丸に乗船したのである。わずか二年余の抑留期間だったが、十年にも匹敵する長くてつらい日々であった。

発船にあたり、さらばシベリアよ、不幸にして永眠した同志よ、骨肉は異国の土と化すも魂は我らとともに祖国に帰ろうと祈った思い出よ……。あれから四十余年、往時の悲惨な記憶をたどりながら、抑留生活の一端を綴り、体験記とする。